

共食を通じた結婚初期夫婦の関係構築過程

TEM のイマジネーションモデルを用いた一考察

随時公開：2024年10月10日

[掲載決定：2024年8月30日]

上川 多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）

宮下 太陽（株式会社日本総合研究所 未来社会価値研究所）

安田 裕子（立命館大学総合心理学部）

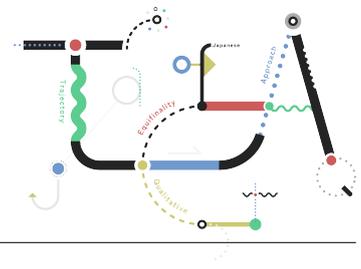
サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

概 要

本論文では異なる環境で育った結婚初期夫婦が「一緒に夕食を食べる」という日常的な共食を通じて、家族としての共食の場をどのように創り上げていくのかを記号論的文化心理学の観点から考察した。「家族での食事」の実現は生活習慣やライフスタイル、仕事による帰宅時間の違いから、困難な状況であることが報告されている。本事例研究の研究協力者は本研究開始時に夕食でのコミュニケーションを重視していた30代後半の夫婦1組（第一著者の家庭）であり、データ収集方法の方法論的背景として、研究者が他者ととも特定の経験を探求し、その研究プロセスにおける相互行為をもとに、ある経験を理解しようとする志向を持つ「相互行為的オートエスノグラフィー」を用いた。そして、夫婦がどのような「過去・現在・未来」を想像しながら夕食での共食を実現させようとしているのかを分析するために「TEMのイマジネーションモデル」を用いた。その結果、「食事を共にしたい」という気持ちとともに夫婦としての親密さを育み、互いの健康状態や現状を気かけながら心的負担が軽減できる夕食の場を創り上げようとする過程を捉えることができた。

キーワード：共食と家族， 団らん， 夫婦， 相互行為的オートエスノグラフィー，
TEM のイマジネーションモデル

連絡先：上川 多恵子（E-mail: tk0715sh@gmail.com）



Relationship Building for Couples in Early Marriage by Eating Together:

A Study Using an Imagination Model of TEM

Online Published: October 10, 2024

[Accepted: August 30, 2024]

KAMIKAWA Taeko (*Ritsumeikan University Open Innovation & Collaboration Research Organization*)

MIYASHITA Taiyo (*The Japan Research Institute, Limited.*)

YASUDA Yuko (*Ritsumeikan University*)

SATO Tatsuya (*Ritsumeikan University*)

Abstract

This study adopted a semiotic cultural psychological perspective to examine how newly married couples raised in different environments create a shared family mealtime space through the everyday practice of eating dinner together. Family meals have been challenging owing to differences in lifestyle habits, lifestyles, and work-related return home times. The participants in this case study were a couple in their late 30s (the first author's family) who prioritized communication during dinner. For data collection, the methodological background of interactive autoethnography was employed, which has “an orientation to understand a particular experience based on interactions in the research process, as the researcher explores specific experiences together with others”. To analyze how the couple tried to realize shared dinners while imagining their past, present, and future, we used the imagination model of TEM. Consequently, we captured the process of creating a dinner setting that could reduce mental burden while nurturing intimacy as a couple. This process was driven by the desire to eat meals together and involved caring about each other's health and current circumstances.

Keywords: eating together and family, family gathering, married couple, interactive autoethnography, imagination model of TEM

Correspondence concerning this article should be sent to:
KAMIKAWA Taeko (E-mail: tk0715sh@gmail.com).

1. はじめに

人びとは日常生活において食に関するどのような選択を行っているのだろうか。サトウ（2015）は、文化は空気のようなものであり、普段は気づかれにくく、むしろ「自然なこと」として認識されやすいことを指摘し、異文化と接触してはじめて自文化に気づくと述べている。そして、それは食についても同様であると指摘している。

人が他者と共に食べるという「共食」には、食を共有する人間集団としての「共食共同体」（家族、地域共同体、民族、宗教共同体、同性、同一身分、友人同士など）、共有する食べもの・食空間・食行動の質・食事作り・食規範・食の情報の共有などが含まれる。さらに、食についての共通観念・精神・倫理・教義を加える考え方もある（河上、2016）。

共食を行う代表的な集団として「家族」が挙げられるが、これはシステムとしても捉えることができる。システムとは、「その複数の要素が互いに相互作用することでつながり合い、その全体が一つのまとまりとして維持され、境界を可能とし、境界の外の環境と区別できるあり方」を指す（無藤、2018、p. 130）。システムの問題は、家族や小規模な集団から、組織、国家、さらには国際関係といった単位まで適用可能である（Bertalanffy, 1968/1973, p. 191）。

衛藤・會退（2015）は家族との食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連を示した文献レビューにおいて、家族の範囲を「一緒に住む家族」とした文献が6件、「定義なし」の文献が24件であったことを報告している。このような先行研究における家族の範囲の定義を考慮し、本論文では、別々に生活していた個人が結婚を機に一緒に住むようになったことを前提としているため、一つのまとまりとしての家族の範囲を「一緒に住む家族」とした。

また、本論文では、これまで別々に暮らしてきた個人と個人がどのようにして共食を実現しながら「一緒に住む家族」として新たな生活を創り上げていくのかというプロセスを質的に研究する。この過程を理解するにあたり、“文化が個人に属する”という文化心理学の観点から文化を捉える。Valsiner は文化を「実在としてではなく生成プロセスとして扱い、人間の心理的システム内において文化が機能するという見方をとり、心的プロセスに内在する文化のダイナミックでプロセス的な性質（宮下ら、2022a, p. 26）」を強調する。さらに、Valsiner

（2007/2013）は、文化心理学の立場から「文化、という高尚なもの、伝統的なもの、という感じがするが、文化心理学にそうしたこだわりはない。むしろ、日常生活におけるその日常らしさを成り立たせているのが記号であり、その総体が文化だと考える。その意味で文化とは記号の配列の総体だ、と言えるかもしれない（p. iv）」と指摘している。このような文化心理学の視点は、夫婦の共食という日常的な場面の理解に重要な示唆を与える。夫婦の食事の場面には、それぞれが育った環境で培った食習慣や価値観が反映されており、共に食事をする中で新たな「日常らしさ」が創出されていく可能性がある。つまり、夫婦の共食は、異なる文化背景を持つ個人が交わり、新たな家族文化が生成されるプロセスの一例として捉えることができる。

サトウ（2006）は、「人間は誕生の瞬間から生身では生きてはいられない。様々な支援が設定されていく。それら全てが文化だと考えるのが Valsiner の基本的立場である（p. 68）」と論じ、「ヒトにおける文化のメカニズムの基本は記号とその作用にある（サトウ、2019, p. 16）」と指摘した。このような心的プロセスに内在する“記号を媒介として組織化された文化”という観点から、本論文では質的研究法の中でも実存性と過程を重視する TEA（Trajectory Equifinality Approach：複線径路等至性アプローチ）を用いて、別々に暮らしてきた個人が結婚を機にどのようにして日常生活の中で食事を共にしていこうとするのかを分析し、家族として夫婦が食事を共にすることの意味を考察する。

先行研究

1. 共食の定義

複数人で食事することを意味するものとして共食という言葉が存在する（中川ら、2010）。もともと共食は動物的身体能力が低い人間が集団として生きていく上で必要とされた戦略である（原田、2013）と考えられてきた。しかし、近年では家族や友人知人など、自分以外の存在と食事を共にするという習慣が精神的な健康に重要な役割がある（木村ら、2018）ことが明らかになっている。木村ら（2018）は、共食は食事に満足感を与え、精神的健康に良好な影響をもたらすことが期待されるとし、共食の質を「食を媒介とした共食者との楽しさの共有（p.

441)」であると定義している。精神的健康に良好な影響をもたらすという観点からは、食事を1人で楽しみたいという場合においては“孤食”が精神的な休息や食事への集中に効果的であるとされる一方で、“共食”は単に会話ができるだけでなく、心的負担が軽減される中で他者との関係維持を可能にすると考えられている（徳永ら、2016）。このような共食は「食事を通して人と人がつながり、他者と共感する機会（中川ら、2010, p. 56）」として機能し、食事がコミュニケーションの手段になっている。また、共食という行為にはその場にある食べ物を他者と分ける能力が必要であるとされており、このような他者と食べ物を分ける能力は、他者の心を想像すること、つまり自分の分け与えた食べ物が他者を喜ばせるということをイメージする力である（河村、2018）とされる。

このようなことから、本論文での共食とは、「食事をコミュニケーションの手段であるとし、心的負担が軽減される他者との関係維持を可能にする行為」ならびに「食事を共にする他者の心を想像したり喜ばせたりするイメージ力が必要とされる行為である」と定義する。

2. 家族の範囲と個人化

家族という概念は家族を家族と言わしめる普遍性を備えながら、多様性と個性性をもっており、家族を理解するには普遍性と眼前にある現実の現象の多様性を同時に把握する必要がある（十島、1998）。こうした家族の複雑性は、その関係性の多面的な性質にも反映されている。家族は近代社会において選択不可能かつ解消困難な関係として把握され、個人化できない関係の象徴として捉えられてきた（山田、2004）。山田（2004）は、個人化を「ある社会的現実に対する選択可能性（解消可能性も含む）の増大」と定義した上で、個人化できない関係性には二面性があることを主張する。それは「個人の自由を制限し、抑圧するという側面をもつ」一方で、「個人に対して経済的、心理的安定性をもたらす」というものである。つまり、選択不可能・解消困難性を担保として経済的、心理的に見捨てられないという期待を持つことができると同時に、無条件に家族を支えなければならないという責任感と義務感をもつことになる（山田、2004）。

しかし、家族の個人化は「家族であること」を選択する自由、「家族であること」を解消する自由を含んだ個人化であり、「家族の範囲を自由に設定する自由」（山田、2004）を有する個人化である。すなわち、結婚しな

いという選択や夫婦関係を解消するといった選択も含み、血縁の有無、法的関係の有無、人間であるかないか（ペットも家族）などの「自分が家族であると選択した範囲が家族である」という意識が普及することが、家族の個人化につながる（山田、2004）。このような家族の個人化を含む多様な家族意識が広まる現代において、西野（2001）は家族という言葉が多用され、家族が当たり前存在と見なされる一方で、家族のつながりに関する実態はそれほど明らかにされていないと指摘している。西野（2001）は、構築主義的な研究の多くは個人が家族という言葉に付与している意味を探っているが、そこで検討されているのは社会的構成体としての家族であって人々が営む家族生活ではないと指摘しており、実際の家族生活を調査する必要性を示唆している。

3. 食事における家族団らんのはじまりと問題意識

前節で述べたように、現代の家族という概念は個人の主観的要素が高い概念であるが、家族の共食の様相も文化や社会によって異なり、特に近代化の中で食と家族は密接に関連づけられてきた（安井、2018）。日本においては、家族の共食は公的な行事であり個人の楽しみとは異なる役割を担っていた時代もあった（福田、2021）。

“食卓での家族団らん”という概念が誕生し始めたのは明治20年代である（石川、2019）。しかし、その当時の家庭での食事は団らんというよりはむしろ生命維持のための義務的な営みであり、さらには家庭内秩序を確認する儀礼、子どもを厳しくしつける家庭内身体教育の場であった（福田、2021）。

家族団らんが一般的な家庭の食事風景となったのは、1970年代ごろである。NHKの国民生活時間調査によると、このころ家族で食事をしている家庭は約9割に達し（表、2012；石川、2019）、テーブルが普及してからは食事中の会話はむしろ積極的にしたほうが良いとされた。その理由として、かつて一人で話していた父親が高度経済成長の企業戦士となって家庭の夕食に帰れず、それに代わって、母親と子どもが話し出したということ（熊倉、2014）や、「夫が仕事に出ていき、昼間は一家がばらばらになってしまうことから、一家が集う食卓に団らんを求めなければならない」という考え方が家族団らんの背景となったことが挙げられている（熊倉、1993）。

また、1980年代後半には“孤食”に対する注意喚起が家庭科教科書においてもなされるようになり（表、2012；石川、2019）、2000年前後は「家族で一緒に食事すべき」

という考えが強迫観念的なものとして捉えられる時期もあった(石川, 2019)。坂田(1996)は、「団らん」があったかのように思い込んだり、「団らん」し続けなければならないと思ひ込んだりする社会心理が、家庭での共食の場を一家団らんのシンボルであるかのように思わせていた事実があると指摘しており、家庭の日常生活における共食は必ずしも家族の連帯にとって大きな意味を持っていたわけではないと主張している。このように、食事は家族が集まる好機ではあるが、強迫的な食卓での家族の団らんの推奨は改める必要があり、それぞれの家庭の実情に沿うコミュニケーションの形を模索するべきである(表, 2010)という問題意識も現れるようになっている。

4. 家族の共食と夫婦関係に関わる意識

では、2000年以降の“家族”の共食については、どのような報告がされているのであろうか。2010年のNHKの調査で「家族だと感じる時はどんな時か」という質問に対し、「自宅で食事をしている時」と答えた人が76%に上り、多くが「家族」と「食」を結びつけているという結果がある。村田・政木(2016)はNHK放送文化研究所による「家族と食の関係」に焦点を当てた調査結果を報告している。16歳から70歳以上の男性1,182名、女性1,302名の合計2,484名を対象に行ったその調査では家族全員で毎日夕食をとることができるのは50代以下では20%にとどまっている。

家族と食に関する研究においては、子どもを持つ家庭を対象とした研究が多い(河村, 2018)。2018年3月には農林水産省によって「食育に関する意識調査報告書」が提出され、「共食や孤食の状況」について報告されている(農林水産省, 2018)。20歳から70歳以上の男性611名、女性780名の1,391名を対象に行ったその報告書によると、「ふだん誰と食事をすることが多いか」という質問に対して、平日(仕事や学校のある日)の場合「家族」と答えた人の割合が最も高いのは「夕食」(82.9%)であった。しかし、世代別に見ると20歳から39歳の割合は男性が62.4%、女性が86.2%となっており、この年齢の男性にとっては女性に比べて家族との夕食が困難であることがわかる。その理由としては、「自分または家族の仕事が忙しいから」が男性(94.1%)、女性(91.0%)と最も高い。しかし、「家族と一緒に食事をする回数を増やしたいと思う」と回答した男性の割合で最も高かったのも20歳から39歳(70.3%)の世代であり、「家族とのコミュニケーションを図ることができる」という理

由を挙げた人の割合が最も高かったのもこの世代(男性87.5%、女性88.9%)であった。このことから、20歳から39歳の世代で家族での夕食におけるコミュニケーションの重要性を認識している男女が多いことが示唆されている。また、食生活に限定しない夫婦の心理的満足度と相互コミュニケーションを扱った研究では、夫婦関係は家族や子どもの成長に影響があるとされ、結婚初期(結婚期間1~2年)に比べて夫婦間の共有情報量やコミュニケーションの時間や回数ははだいに減少する傾向が見られる(吉田・津田, 2007)という指摘もある。

上述したように、日本の家族と食に関する研究では子どもを持つ家庭を対象としてその共食状況や実態、共食の頻度や意識を調査された研究が多く見られるが、夫婦に焦点を当てた研究はあまり見られない。謝(2020)は日本人の夫と中国人の妻の家庭における食生活を事例として、移民として日本で生活する中国人女性たちにとって食がどのような役割を果たしているのかを明らかにしているが、このような研究は国際結婚の家庭を対象としたものであり、日本人夫婦に焦点を当てた研究は未だ多くない。

「食事を共にしているという行為が家族の関係性や価値観を象徴するものならば、どういう人たちが家族と一緒に食事をするのか/しうるのかについても、理解する必要がある(品田, 2019, p. 22)」という指摘がされているように、日本の家族と食に関する研究において夫婦に焦点を当てた研究を行うことは、個人化が指摘される家族のつながりとともに、家族の食に関わる実態や意識を理解する上で重要な示唆を与えてくれるのではないだろうか。

研究目的と研究方法

1. 研究目的

家族の個人化が指摘され、家庭や共食に対する意味づけや役割も個人たちにとって異なっているが、どのような個人がどのようにして食事を共にし、家族としての関係性を築こうとしていくのか、というような“実際の生活”の実態はそれほど明らかにされていない。また、20歳から39歳の世代は「自分または家族の仕事で忙しいから」という理由で「家族と一緒に食事をしたい」と思ってもそれを実現するのが難しい現状が明らかとなっ

ているが、そのような年代の夫婦を対象とした質的な研究は見られない。

そこで本論文では、結婚初期の夫婦が、どのようにして「一緒に夕食を食べる」という日常的な共食を実現させようとしているのかについて分析し、「一緒に住む家族」としてどのように関係性を構築しながら生活していくのかを考察することを目的とする。

2. データ収集方法の方法論的背景：

相互行為的オートエスノグラフィー

夫婦関係という領域は夫婦間システムという閉ざされた領域である（吉田・津田，2007）。また、結婚、夫婦、家族の領域における研究を中心的に行ってきた家族社会学では個人内や夫婦間での影響関係よりも社会変動が家族や夫婦にどのような影響を及ぼしたかを研究することが多く（伊藤，2015）、本研究のような結婚初期夫婦の日常における共食の様相を質的に研究することは意義のあることであると考えられる。しかしながら、夫婦間という私的な領域を対象とすることは決して容易なことではなく、近い他者であることによって語られにくいものも多いことが推察される。

また、本研究の着想は筆頭著者自身が結婚初期に感じたパートナーとの食生活に対する異なった習慣であり、その点についてパートナーからも同様の意見を聞いたことが家族や夫婦の共食状況に対する関心の始まりでもあった。よって、本論文では研究開始当時に結婚初期にあたった筆頭著者の家庭を対象とし、パートナーも協力者としての研究参加に同意した。

本論文の研究手法は「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察するオートエスノグラフィーの手法（井本，2013，p. 104）」を用いる。オートエスノグラフィーとは、「社会科学において、研究者が自ら有する文化（own culture）を理解することを目的とした記述的研究の総称（土元・サトウ，2022，p. 72）」であり、自分の経験を振り返り、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかということを探ることを通して、文化的・社会的文脈の理解を深めることを目指す（井本，2013）方法論である。また、土元（2022）はオートエスノグラフィーの実践をする中で取り組むべき課題として、「自己を描くという行為はどのようになされ、いかなる意味を持っているのか。それはどのように他者（人々）と結びついているのか（p. 56）」を明らかにすることが重要であると指摘する。

土元・サトウ（2022）はオートエスノグラフィーの方法論的志向を自叙伝的志向、相互行為的志向、エスノグラフィー的志向、熟慮的志向の4つに類型化している。そのうちの一つである相互行為的志向をもつ「相互行為的オートエスノグラフィー」とは、「研究者が他者ととも特定の経験を探究し、その研究プロセスにおける相互行為をもとに、ある経験を理解しようとする志向（土元・サトウ，2022）」であり、「研究者の経験を題材としながらも、他者を通して（他者と語りや協同構築したり、対話したり、他者の物語を理解したりすることで）その経験を新たに意味づけようとする（土元，2022，p. 46）」ものである。

このような相互行為的オートエスノグラフィーの観点から、異なる環境で育った個々人が夫婦として共に生活する中で日常化していく共食という行為について互いに語り合いながら「家族との食事」という経験を探究し、その経験プロセスが相互行為的にどのような「意味づけ」（meaning）となっているのかを理解する。本論文で定義する「意味づけ」については、「日常的なものからきわめて特異な出来事まで、種々の生の経験を記号を用いてとらえる過程は意味構築として考えることができ、そこで構築された意味は自己を明確化し、その後の行動を導く（小松，2018，p. 15）」ものであるとする。

3. 分析方法：本研究での分析の特徴

本論文は「文化を人間の心的機能に内在的なものとして扱う（Valsiner，2007/2013，p. 19）」文化心理学の考え方をを用いるものであり、異なる環境で育った個人と個人がどのようにして「一緒に夕食を食べる」ことを実現していくのかという点を個々人の思考や感情に着目しながら分析を行う。豊田・卒田（2023）は個人に焦点をあてた従来のTEAを拡張し、立場の異なる複数の個人を同時に分析する「双方向TEA」の意義を主張している。本論文では、そのアイディアに触発されながらもそれとは少し異なる志向を持つ。具体的には、文化的背景の異なる個人が結婚してからの共食を通じて生まれた心の揺らぎに対して、互いにどのような思いを巡らしながら「一緒に夕食を食べる」ということを実現していったのかという経験の複線径路を捉えるために、「双方向TEM」を用いて分析する。

本研究が「双方向TEA」ではなく「双方向TEM」を用いる理由は以下のとおりである。TEAはTEM（Trajectory Equifinality Modeling：複線径路等至性モ

デリング)を中核としつつ、より広範な分析枠組みを提供するが、本論文では特に夫婦2人の経験の軌跡を時間軸に沿って可視化し、その相互作用を分析することに焦点を当てるため、TEMに特化した「双方向TEM」を用いる。「双方向TEM」とは、その場における2者の径路を非可逆的時間の流れに沿って並行的に図示することで、その場で展開している人間関係の構築過程を分析する方法である。

さらに、本論文では、各人が持つ文化的背景や思考を明示的に分析するために「TEMのイメージネーションモデル(宮下ら, 2022b)」の考え方を活用する。以下では「TEMのイメージネーションモデル」による分析の特徴を述べる。

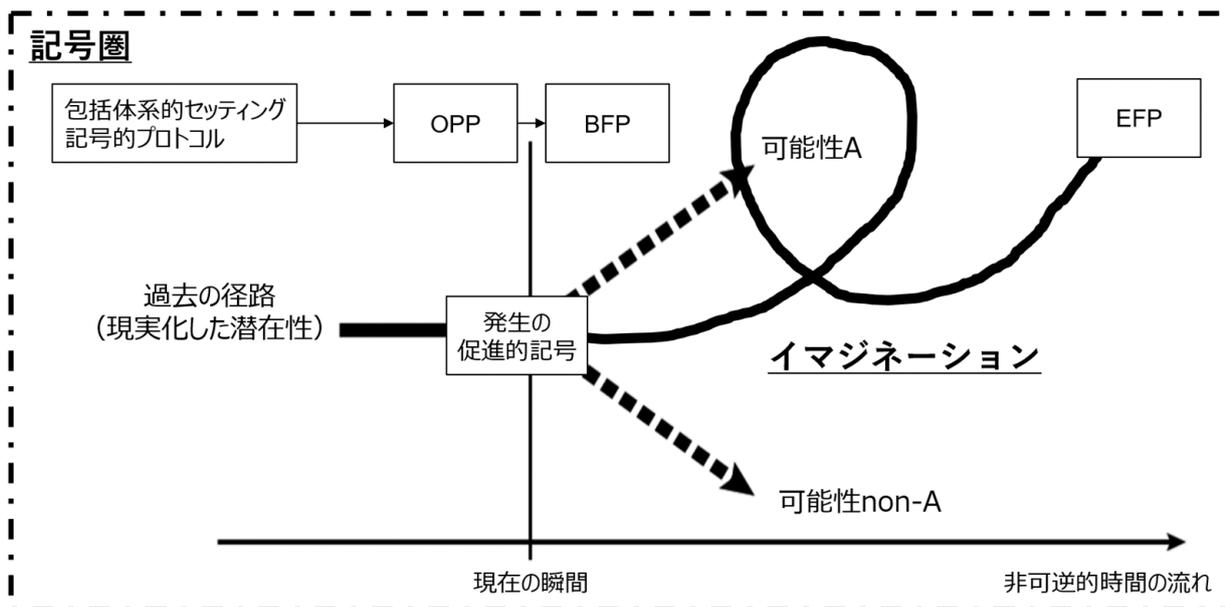
宮下ら(2022b)は、Valsinerが提示したTEMの基本単位をもとに、「トリガー」「リソース」「アウトカム」を伴う時間的な連続のループのことを指すイメージネーションループモデル(Zittoun & Gillespie, 2016)を発展的に統合する形で、記号論的文化心理学に立脚した「TEMのイメージネーションモデル(図1)」を示した。イメージネーションとは「過去の経験をもとに新たな考え方やイメージをつくるプロセスを意味し、現実と近接する世界の想像(木戸, 2023, p. 63)」を扱うものである。イメージネーションは日本語に訳せば「想像」という表現となるが、イメージネーションを示す「想像」という言葉には「構想」の意味が含まれている(木戸, 2023)。このようなイメージネーションの理論を取り入れた「TEMのイマ

ジネーションモデル」は、TEM分析を行う際に研究協力者の生活している環境を研究者がより深く認識し把握することを支援する手段の一つであり(宮下ら, 2022b)、その特徴は以下の3つである。

一つ目は、TEMが対象とする範囲を明確に意識するための枠組みとして「記号圏」という概念を取り入れた点である。記号圏とはロシアの文学・文化研究者であるロトマン(Juri Lotman)により提唱された概念である。記号圏とは記号が記号として働く前提条件であり、ヒトと記号の相互作用が機能するための必要不可欠な領域として捉えることができる(宮下ら, 2022b)。図1における「包括体系的セッティング」とは「記号圏において人が通常通るであろうと考えられる出来事が機能する諸環境(場・状況)」を示し、「記号的プロトコル」とは「包括体系的セッティングにおいて、諸環境が記号に完全な効果を発揮させることを許した場合に人が通常とることが要請される行動継起(シークエンス)のこと」である(宮下ら, 2022b)。言い換えれば、ある記号圏で出来事が起こる場において個人が通常行うであろう典型的なパターンのことを指す。

二つ目は、研究対象となる記号圏において「ある状況下で人が通常通るであろうと考えられる出来事」が何らかの影響で「これまでとは異なる選択を迫られる出来事」となったことを明示し、そのきっかけ(トリガー)となる記号を「発生の促進的記号」として概念化した点である。促進的記号とは、福島農家で田植えの始まりを告げる

図1. 記号圏における「TEMのイメージネーションモデル」

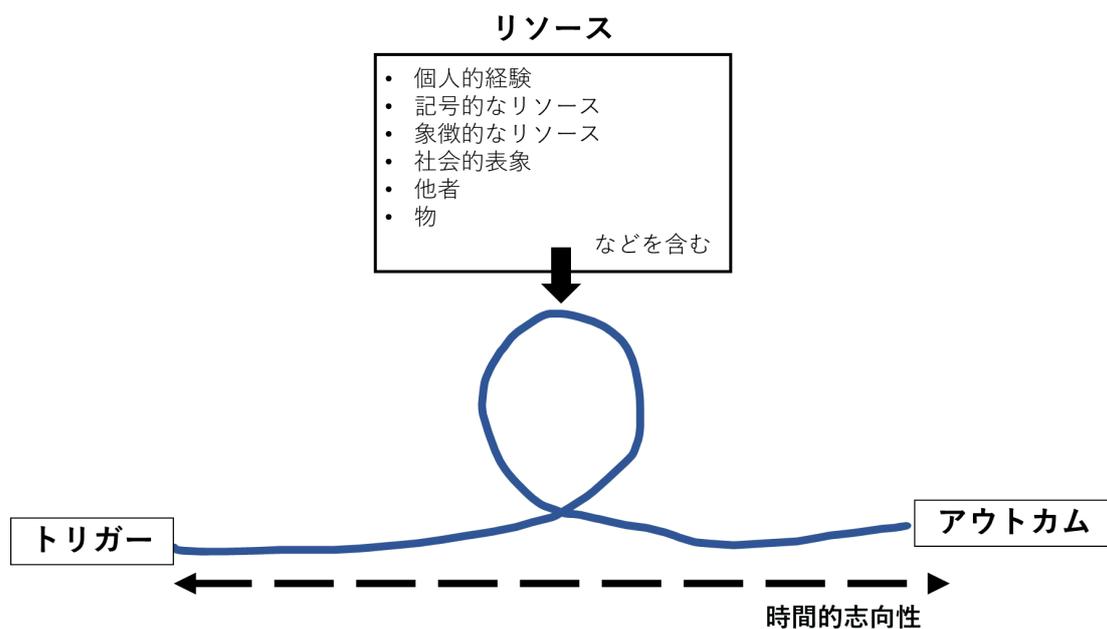


サインとして重視されている雪ウサギ（サトウ，2019）の例で見られる「行動を駆り立てる記号（p. 36）」であるが、「発生の促進的記号」とは、「ある状況下で人が通常通るであろうと考えられる出来事」が何らかの影響で「これまでとは異なる選択を迫られる出来事」となる際に発生し、そこで人に何らかの深い思考を呼び起こし、イマジネーションのトリガーとなる記号である。つまり、TEM 図においては等至点（EFP: Equifinality Point）に至る大きな分岐となりえた分岐点（BFP: Bifurcation Point）で発生し、個人がこれまで持っていた価値観を揺るがすような記号であると言える。

三つ目は、上述した「発生の促進的記号」が働いたと考えられる“分岐点”での人と記号との相互作用について具体的な有り様を記述するために、イマジネーションループを用いて分析することである。イマジネーションは図2のように「トリガー（きっかけ）」（以下、トリガー）、「リソース」、「アウトカム（結果）」（以下、アウトカム）を伴う「時間的な連続のループ」であるとして概念化されている（Zittoun & Gillespie, 2016, 著者訳）。「トリガー」は、経験の近位圏からの切り離しを引き起こすものであると定義されており、「イマジネーションする」ということは、「今—ここ」にある近位の経験から人を切り離すことである。「リソース」は、「個人的経験・記号的なリソース・象徴的なリソース・社会的表象・他者・物など」を指し、個人の経験だけでなく社会的に共有されたイメージもリソースとなる。個人が持っているリソー

スは多ければ多いほど想像を広げていくことができると考えられており、それらのリソースを使って人々は想像を広げていく。そして、想像して現実世界に戻ってくる時に新しい何かが得られる。この新しい何かとは、想像してみても楽しかったというような感情や新しいアイデアが浮かんでくるといったこと、どのような計画を立てようかといった計画などが含まれ（Zittoun, 2020）、このような新しい何かが得られるという結果が「アウトカム」である。また、図2における「時間的志向性」とは、「時間的方向性」を示すものであり、未来のことを予期したり、過去のことを想起したりすることを表す。ここでの想起とは remembering であり、過去のことを考えるということである。また、予期とは anticipating であり、これからのこと（実現可能性が高いものも低いものも含む）を考えることである（Zittoun, 2020）。木戸（2023）は「意識を探索するイマジネーションは遠い過去の経験を探ったり、未来の体験を探ったりすることができる（p. 69）」と論じている。このようなことから、図2における点線で示した矢印は「時間的志向性」を表しており、右向き矢印は「未来」を予期することを表し、左向き矢印は「過去」を想起することを表している。人のイマジネーションは、「トリガー」が発生することによって始まり、さまざまな「リソース」の影響を受けて過去や未来の経験を探ったりすることで「アウトカム」へと至る。

図2. イマジネーションループ（Zittoun & Gillespie (2015), Zittoun (2020), 宮下ら (2022b) をもとに作成）



本論文での研究協力者の概要

1. 当事者 1 と当事者 2 について

TEA における研究協力者は「研究対象となる現象を経験した（あるいは経験しなかった）当事者（福田，2022）」であるという HSI（歴史的構造化ご招待）の観点から、本研究の研究協力者は結婚するまでの食事時間や食習慣の違いを日常的に感じながらも「一緒に夕食を食べる」という経験をしている 30 代後半の夫婦 1 組を対象とした。ほぼ同年齢の二人は 30 代半ばに出会い半年の交際を経て結婚へと至った。研究対象となった期間は「入籍と同時に同居生活が始まり、当事者 2 が妊娠する」という約 1 年間である。なお、本事例の研究調査期間は新型コロナウイルスによる影響で日本政府から外出自粛や外食自粛、少人数に限った共食が求められていた期間であった。研究協力者（当事者 1：夫，当事者 2：妻・筆頭著者）の入籍前までの異なる食習慣については以下のとおりである。

当事者 1 は 15 歳から力士となり 20 代後半までは父母が営む相撲部屋の一員として、夕食は（家族との食事というよりは）同じ力士仲間と食卓を囲む生活をした。力士を引退後は一人暮らしを始めており、仕事の影響もあって食事の時間は不規則になりがちであった。朝食食はとらず、夕食のみという生活が続いていた。

当事者 2 は幼少期から家族そろって食事をしている印象が強く、父親が帰宅後一人で夕食を食べていたとしても家族での会話がなされていた記憶がある。高校を卒業後は留学と就労のために、約 10 年間で海外で暮らし、日本に帰国後も一人暮らしが長かった。食事時間は規則的であったが基本的には孤食が多く、夕食を中心に友人や職場関係者と共食するという生活をしてきた。

このように、当事者 1 と当事者 2 は「家族で夕食を食べる」ということに対する異なった生活習慣を経験している。特に成人して一人暮らしを経験してからの食事時間の違いは顕著であり、当事者 1 の食事時間は不規則であったのに対し、当事者 2 の食事時間は規則的であった。

本データの収集方法と分析手順

1. 本データの収集方法と倫理的配慮

本論文では研究調査者であり研究協力者でもある筆頭著者が、家族という“他者”と「一緒に夕食を食べる」という共通の経験を探求し、その経験プロセスをどのように意味づけているのかを理解するために、相互行為的オートエスノグラフィーの観点から対話形式でインタビューを行った。

倫理的配慮として、協力者に対して研究に関する事前説明を行い、本研究への参加が日常生活での不利益にならないかという確認を行った。協力者の研究参加の自由と中断を保障し、研究参加の同意は事前説明を行った際に得ているが、インタビューデータの録音を行う際にも再度研究参加の同意に対する確認を行った。また、本研究でのインタビュー調査は対話形式をとることにより、「一緒に夕食を食べる」ことについて、自由に夫婦としての意見交換ができるように進めた。なお、執筆した内容についての確認も行っている。

2. 本データの分析手順

(1) インタビュー前の手続きに関する工夫

松嶋（2004）は当事者の視点を理解するには調査者の認識を反省的に振り返り、自らのあり方を問い直すことでもであると指摘している。そこで、当事者 1 にインタビューを行う前に、当事者 2 は当事者 1 の「一緒に夕食を食べる」径路の予想 TEM 図（文字は入れずに簡易的に曲線と非可逆的時間だけを描いた図）を描くことを試みた。相互行為的オートエスノグラフィーは「他者を通して（他者と語りや協同構築したり、対話したり、他者の物語を理解したりすることで）その経験を新たに意味づけようとするもの」であるため、1 回目のインタビューの前に当事者 1 の「一緒に夕食を食べる」という行動が当事者 2 からどのように見えていたのかを明示することで、互いの内省が促されると考えたからである。また、当事者 2 が当事者 1 の予想 TEM 図を描いたうえでイ

インタビューを行うという試みは、当事者1にとってはインタビュー内容が理解しやすくなるという利点があったと同時に、当事者2にとっては自身が想像していた当事者1の意識と全く異なっていたことが分かった（当事者1が1回目のインタビューを始める前に予想TEM図を描き直した）。このように、当事者1と当事者2は互いの共食状況に対する意識に何かしらの違いがあることを知ったうえで1回目のインタビューを実施した。

(2) 1回目のインタビュー

当事者1と当事者2が話し合うトピックを明確にするために、記号圏を「家族との食事」とし、包括体系的セッティングを「家族と一緒に夕食を食べるという場面」に設定した。次にインタビュー前の工夫として用意していた予想TEM図を当事者1と当事者2が一緒に見ながら1回目の非構造化インタビュー（37分09秒）を行った。文字化して切片化したインタビューデータに基づいて当事者1と当事者2それぞれのTEM図を描き、その上で当事者1と当事者2の径路を並行して記述することによる双方向TEM図を作成した。このような双方向TEM図を用いた図を作成することによって、当事者たちがどのようなタイミングで「一緒に夕食を食べること」について自覚的になったのか、「一緒に夕食を食べる」経験を当事者たちがどのように創り上げていったのかを可視化した。

また、1回目のインタビューを行った後で、「家族で食事をするに関する典型的なパターン」（表1）を設定した。本事例では、家族一緒に夕食を食べるという場面について話し合ったが、その際に互いの語りから多く聞かれたのは、「だれとよく食べていたか」「どのぐらい一

緒に食べていたか」「家族と共食することの意味や利点」などが中心となっていた。つまり、表1は当事者1と当事者2のそれぞれが入籍前に持っていた「家族と食事をする」とに対するイメージであるとともに、「当たり前のように」感じていたものであると言える。

(3) 2回目のインタビュー

表1のような「家族で食事をする」とに関する典型的なパターンがあったことを念頭に、当事者1と当事者2には、互いに1回目のインタビューを受けて作成した個々人のTEM図と双方向TEM図の両方を確認しながら2回目のインタビュー（44分30秒）を行い、分析を深めた。その後、2回目のインタビュー内容を反映して「分析と結果」を明文化し、文面で分析内容を当事者1と当事者2で確認し合った。

(4) 3回目のインタビュー

最後に、イマジネーションループを用いて「一緒に夕食を食べる」という「アウトカム」に至った「トリガー」と「リソース」を分析し、当事者たちがどのような過去や未来を探りながら「一緒に夕食を食べる」という日常生活の行為を実現していこうとしたのかを分析した。実質的には当事者1と当事者2が双方向TEM図に関する文面での分析結果を見ながら記述内容の再確認を行うというものであり、3回目のインタビューでは主に既存の分析内容の確認に焦点が当てられた。結果的として、3回目のインタビューでは当事者1と当事者2から新しい内容への言及はなかった。

表1. 本事例における入籍前の当事者1と当事者2の「家族と食事をする」とに関する典型的なパターン

項目	当事者1	当事者2
家族と食事をする頻度	幼少の頃は祖母と食事をするが多かった。成人してからも家族との食事時間が合わず一人で済ませることが多かった。	幼少の頃は家族と食事をしている印象が強く、成人して一人暮らしを始めてからも実家に戻れば家族と食事をするが多かった。
家族と食事をすることの利点	子どもに寂しさを感じさせない。	食事に対して楽しみを感じられる。
家族との共食に関する認識	話すことがなければ、一緒に食事をする必要性を感じない。	できる限り共食できる機会を増やしたい。

分析と結果

1. 「TEM のイマジネーションモデル」による 分析の枠組み

(1) TEM による分析の枠組み

表 2 は本事例の双方向 TEM 図における分析のための枠組みである。文中では、[] を OPP (Obligatory Passage Point : 必須通過点), 『 』 を BFP, [] を SD (Social Direction : 社会的方向づけ) および SG (Social Guidance : 社会的助勢) の表記として用いている。SD および SG は「径路にかかる力の作用として捉えるものであるが、該当するラベルを、力としてではなく、行動ないしは感情・認識として径路に組み込む可視化の仕方もある (安田, 2015, p. 56)」とされており、径路と諸力の捉え方の重要性が論じられている。本論文では当事者が意識的に「ある感情や認識」を持っていた場合には、その感情や認識を径路に組み込んでいる。時期区分は BFP (家族と一緒に夕食を食べると意識の変容に影響を与えたと考えられる経験) を区切りとし、当事者 1 と当事者 2 の EFP (一緒に夕食を食べる) へ至るまでの径路を区分した。また、径路において他者の行為を記述する場合は事象を囲む四角の中をグレーで示した。本論文で他者の行為と自己の行為を区別して記述する理由は 2 つある。一つ目は、双方向 TEM 図を用いて分析していることが理由として挙げられる。つまり、事象によっては、他者 (相手) の行為を見て何らかの判断をしているのは自己であるが、その行為自体を実際に行っているのは他者である場合があるからである。二つ目は、本論文の TEM 図にイマジネーションループを示すループを加えたことが一因となっている。つまり、本論文の TEM 図でイマジネーションループのアウトカムに繋がる行為は自己の行為であるため、それを明示するために他者と自己の行為を区別している。なお、《 》は時期区分の表記として用い、「 」は TEM の径路に可視化した経験として強調するもの、イマジネーションループの概念で捉えたもの (リソースとアウトカム)、語りそのもの (当事者自身の語りは下線で示す) に用いている。

(2) イマジネーションループによる分析の枠組み

イマジネーションループによる分析では「一緒に夕食を食べる」を「アウトカム」として設定した。「一緒に夕食を食べる」という課題について自覚的に考え始めるトリガーとなった BFP を探り、その時点でどのようなイマジネーションが広がることによって次の行為 (一緒に夕食を食べる行為に繋がる行為) へと移っていったのかを分析する。このようなイマジネーションを分析することで、異なる食習慣を持つ当事者たちがどのような過去を想起し、未来を予期しながら一緒に夕食を食べるといふ行為を実現しようとしていくのかを考察する。

なお、図 3 の双方向 TEM 図ではイマジネーションループで分析するポイントとなった個所をループで示しており、当事者 1 (図 4, 図 5) と当事者 2 (図 6, 図 7) のイマジネーションループではそれぞれのループの具体的な内容について記述する。図 3 で示すループは分析対象とするイマジネーションが発生した時点を示しているが、図 4 から図 7 で示すループの向きは時間的志向性の考え方に基づいて記述する。左向きのループは過去について想起したことを示し、右向きのループは未来について予期したことを示している。文中では、当事者がどのような過去を想起し、未来を予期していたのかを〈 〉で示す。

2. 「一緒に夕食を食べる」双方向 TEM 図からの 分析と結果

ここでは、二人の「一緒に夕食を食べる」という経験のプロセスが個別でありながらも、家族という一つの共同体として描くことを試みるため、双方向 TEM 図 (図 3) を描いて分析を行った。

図 3 における右側は当事者 1 の径路であり、左側は当事者 2 の径路である。中央部の EFP 「一緒に夕食を食べる」に径路が近づくにつれて当事者 1 と当事者 2 が一緒に夕食を食べることに對して歩み寄っていったことを示している。つまり、図 3 では「一緒に夕食を食べる」という行為を EFP として設定しているが、当事者 1 と当事者 2 が継続的に「一緒に夕食を食べる」という行為を実現する中で互いがどのようなイマジネーションを巡らしながら試行錯誤を繰り返していたのかを示すために、双方向 TEM 図においてもループを描くことでイマジネーションが発生した時点を示した。また、中心部

表 2. 本事例における諸概念の枠組み (安田, 2019; 上川, 2023; 宮下ら, 2022b)

諸概念	本事例における諸概念の設定
EFP: 等至点	一緒に夕食を食べる
P-EFP: 両極化した等至点	別々に夕食を食べる
2nd EFP: 2nd 等至点	当事者 1: 団らんの場として一緒に夕食を食べたい 当事者 2: 当事者 1 と団らんでできる食習慣が作れるようにしたい
P-2nd EFP: 両極化した 2nd 等至点	当事者 1: 自分のことは気にせず当事者 2 に夕食を食べてもらう 当事者 2: 別の時間を団らんの時間にあてる
OPP: 必須通過点	入籍前の習慣から家族一緒に夕食を食べることにに関して当然だと感じている経験 当事者 1: なし 当事者 2: 当事者 1 の帰りを待って一緒に夕食を食べようとする
BFP: 分岐点	家族と一緒に夕食を食べると意識の変容に影響を与えたと考えられる経験 当事者 1: ①食事を一緒に食べたいという気持ちが強くなる ②当事者 2 の体調が心配になる 当事者 2: ①体重が増える ②妊娠を機に食べる量と作る量のバランスがわかるようになる
可能な経路	収集されたデータに明示的でなくとも「EFP: 一緒に夕食を食べる」または「P-EFP: 別々に夕食を食べる」に至るまでにありうると想定される経路
SD: 社会的方向づけ	「EFP: 一緒に夕食を食べる」に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす諸力 当事者 1: 【当事者 1 の母親との死別による父親の精神状態】 父親と話す話題がない状態, 父親からのネガティブ発言, 当事者 1 自身も精神的に辛くなる状況 【昼食を食べない習慣】 【当事者 2 の様子・状態】 当事者 2 が習慣にしていた運動がしづらくなる, 当事者 2 が妊婦検診を受けている, 当事者 2 の食べる量が減った 当事者 2: 【子どもの頃からの食事時間】 家族・友人・1 人での食事時間は 18 時～19 時頃, 食事に使う時間は 30 分～1 時間程度 【当事者 1 との食事時間】 帰宅時間の影響で 20 時を過ぎることが多い, 食事に使う時間は 2 時間程度 【作る食事量の増加】
SG: 社会的助勢	EFP: 一緒に夕食を食べる」に向かう行動や選択に促進的・助勢的な影響を及ぼす諸力 当事者 1: 【変化した父親の精神状態】 当事者 2 に対する気遣い, 当事者 2 に関する話題 【当事者 2 とのコミュニケーション】 当事者 2 との会話, 自分の体調に対する当事者 2 の気遣いの言葉 【当事者 2 からの食事の誘い】 【当事者 1 の帰りを待って食事をする当事者 2】 【一緒に食べたいと思う当事者 1 の気持ち】 悩むが, 本心は一緒に食べたい, 「先に食べて休んでいいよ」と言ってあげられていない 当事者 2: 【子どもの頃からの食習慣】 【習慣にしている運動】 【コロナ禍による当事者 2 自身の外出減】 【当事者 1 が食事をする様子】 【食事時の当事者 1 との会話】 【当事者 1・胎児との食習慣の調整】 悪阻, 胎児の成長, みんなで元気でいられる過ごし方の模索, 総菜を買う, 体重増加を受け入れる気持ちの変化 【仕事を含めて外出が多い当事者 1】 【当事者 1 との話し合い】
発生の促進的記号	「EFP: 一緒に夕食を食べる」ことについて自覚的に考え始めたトリガー (きっかけ) となった BFP で発生した促進的記号 当事者 1: 当事者 2 の存在 当事者 2: 増えだした自身の体重
ループ (イマジネーションループ)	「EFP: 一緒に夕食を食べる」に至るのに特に影響を与えたイマジネーション

に示した「入籍し同居する」「妊娠がわかる」という共通した出来事があった中で、左右に示した当事者1と当事者2の径路には各々の非可逆的時間(→)が流れていることを示している。

(1) 当事者1の「一緒に夕食を食べる」プロセス

当事者1は中学を卒業してから父親とは師弟関係であったこともあり、特に話すことがなければ「家族と一緒に食べる意味を感じていな」かったが、入籍後に当事者2と生活する中で『食事を一緒に食べたいという気持ちが強くな』った(BFP①)。当事者1は当事者2と知り合う前に母親を亡くしており、師弟関係であった父親と同居していたが、伴侶を失った父親の精神状態【SD】が落ち着かず一緒に食事をするのを避ける傾向があった。当事者1は「父親の支えになっていた母(父親から見れば配偶者)が亡くなって、オヤジも荒れていて。自分もそれで(気持ち的に)かなり病んで、正直一緒に食べたくない方の気持ちが強くて」と語っており、「誰かと一緒に食事をするよりも何も食べずに寝た方がましだ」と思うようなこともあったと語った。また、「家族と一緒にご飯を食べるのは逆に違和感があった。特に話すこともないのに一緒にご飯を食べる意味があるのかって」とも語っており、家族との食事に対して消極的だったことを語っている。しかし、当事者2と入籍し同居するようになってからは「誰かと一緒に食べたいという気持ちが全くなかった状態から真逆で、いきなり急上昇というか一緒に食べたいという気持ちが強くなった」と語った。そのような気持ちが強くなったのは、当事者2が食事を準備する中で「自分の体調を気遣ってくれるし、食事をしながらいろんな話ができるから【SG】」という理由を語っている。つまり、当事者1にとっては、当事者2の存在(発生の促進的記号)そのものが、「一緒に夕食を食べる」ことを考え始めるきっかけとなっていた。そしてそのうちに、共通の話題として、当事者2への気遣いの言葉などを述べるようになった父親【SG】を見て、当事者1と「父親の会話も増える」ようになった。当事者1は父親の変化について、「『(当事者2も当事者1もいるし)俺ももっと長生きしないとな』というような前向きな発言をオヤジがするようになって、自分もなんとなくオヤジと食事をしたり話をしたりしてもいいかと思うようになった」と語っている。当事者1が食事を一緒に食べたいという気持ちが強くなった背景にはこのような父親とのエピソードも含まれており、当事者1が仕事の関係で帰宅時間が遅くなった場合も当事者2が食

事を待ってくれていたことから、当事者1は一緒に夕食を食べることを続けていたことがわかった。

当事者2が妊娠し、『当事者2の体調が心配になる(BFP②)』ようになってから、当事者1は「当事者2と一緒に食べていていいか悩み」ながら一緒に夕食を食べ続けていた。悩んでいた時のことについて当事者1は「あんまり遅い時間にご飯を食べるのも体に良くないんじゃないかなとかっていう違和感っていうか、心配が多くて。食べていいのかいけないのか、悩むことがすごく多かった」と振り返っており、「なんかずっと自分のリズムに当事者2を付き合わせちゃってるなっていう気持ちがすごく出てきて、どうすればいいか揺れ動いてた感じ」と当時の気持ちを表現した。「だけど、本心は当事者2と一緒に食べたいという気持ちが強くて、本当は『先に食べて休んでいいんだよ』くらいの一言が言えたらよかったんだけど、やっぱり話を聞いてほしいとか思ってしまった【SG】」と、当事者1には夕食を済ませて帰宅するという選択や当事者2だけ先に食べることを提案することもできたが、そのようにできなかったことを語った。しかし、このような当事者1自身の気持ちだけではなく、一緒に夕食を食べることによって、当事者2の食べる量が減っていること【SD】などにも気づいており、「今までと違ってこんなにも残しているけど、本当に大丈夫なのかな」と思ったり、当事者1が一人で買い物をする時も「(当事者2が) 甘いものを食べて血糖値が上がったら良くないけど、ちょっとでも喜んでもらえたらいいかな」と当事者2が食べることを想像して買うものを選んだりしていたと語った。このように「一緒に夕食を食べる」ことに対する悩みを感じながらも、最終的には当事者2が当事者1の帰宅するのを待って夕食を食べる様子を見ること【SG】で当事者1は「一緒に夕食を食べる(EFP)」選択をしていた。そして当事者1は、「団らんの場合として一緒に夕食を食べたい(2nd-EFP)」という未来展望を持つようになった。

(2) 当事者2の「一緒に夕食を食べる」プロセス

当事者2は、入籍前までの習慣として18時～19時頃には夕食を食べることが多かった。それは子どもの頃からの食事時間【SD】がその時間帯だったこともある。また、子どもの頃からの食習慣【SG】として家族がそろって食事することは自然な行いだったため、入籍後に「当事者1の帰りを待って一緒に夕食を食べようとする(OPP)」ことは当然のこととして受け入れられるものであった。しかし、結婚してから急に増えだした自身

の体重（発生の促進的記号）が気になり始め、『体重が増える（BFP ①）』という現状の中で当事者1と一緒に夕食を食べるということに対して悩み始めた。当事者2は「結婚する前の1年半くらいずっと続けてきていた運動があって【SG】、少し体重が自分の理想に近づいてきていたりしたこともあったから、それが増え始めて少し焦った感じだった」と語っているが、運動を続けているから（少しくらい体重が増えても）大丈夫だろうという考えもあって「一緒に夕食を食べる」ことを続けた。しかし、体重が増えたことが当事者2にとって今後の食生活について考えるきっかけを与える大きな経験となっていたことには違いなかった。また、「ただ、コロナ禍になって自分が外出することが減ってしまった【SG】し、一緒にテレビを見ながら話したり、仕事の話をしたりするのも楽しい【SG】から遅くなくても夜ご飯を一緒に食べられたらいいなと思って」とも語っている。このようにして、当事者2は当事者1と一緒に遅めの夕食を食べ続けるという選択をした。

その後、『妊娠を機に食べる量と作る量のバランスがわかるようになる（BFP ②）』ったことで、当事者1の帰宅時間が遅くなるときは17時頃に間食をすることにした。「なんていうか、これまで二人で食べられる量をたくさん作ってた感じだったけど、別に最初から絶対一緒に夕食を食べないといけなわけじゃなくて、自分は夕方5時ぐらいにおにぎりとか納豆とか少し間食しておいてっていうのを自然にするようになってきた気がする。当事者1が帰宅してから同じようにたくさん食べなくてもいいんじゃないか。っていう自分のスタイルみたいなのがわかってきた」と語っており、当事者1の帰宅が遅くても自分なりに一緒に夕食を食べられればそれでいいと思えるようになった。当事者2がこのように『食べる量と作る量のバランスがわかるようになった』のは、食習慣の調整【SG】に対する意識が強くなり働いたからであり、妊娠による悪阻、胎児の成長、みんなで元気でいられる過ごし方を模索したこと、総菜を買うこと、体重増加を受け入れる気持ちの変化が現れたことが「一緒に夕食を食べる」径路に影響を与えていた。

また、仕事を含めて外出が多い当事者1【SG】の現状や当事者1との話し合い【SG】も影響して、当事者1が帰宅前に電話をくれるようになった。「自分も当事者1と団らんしたいっていう気持ちはあるけど、（当事者1が）仕事で出ていることも多いから一緒にゆっくりできるのは夕食の時間だけだし。ちょっとしんどいときは『先に横になってるね』とは言っているしね。あとは手作りにこだわらなくても総菜も当事者1は好んで

食べてくれるし」と語っており、当事者1と話し合いながら夕食の時間を互いの団らんの場にしていった。当事者2にとっては当事者1の帰宅前に夕食を1人で済ませ、食事とは別の時間を団らんの時間にあてるということも考えれば可能であった。しかし、当事者1の状況を理解しようと努めながら、「夕食の場」で「当事者1とコミュニケーションがとれる食習慣を作れるようにしたい（2nd-EFP）」という当事者1との関係を良好にするための食習慣を作ろうとする未来展望を持つようになっていた。

(3) 時期区分と径路の揺れに関する分析結果

本論文では双方向TEM図を描くことによって、当事者1と当事者2それぞれの“個人”としての時期区分と、“家族という共同体”としての時期区分という二種類の時期区分を捉えることができた。

当事者1の個人としての時期区分は《1期：生きるために食事をする》、《2期：団らんとしての食事を思い出す》、《3期：当事者2の体調に関わる食生活リズムを心配する》という3つが捉えられた。また、当事者2の個人としての時期区分は《1期：一緒に食べるのは当然だと思っている》、《2期：食生活リズムの変化を感じる》、《3期：当事者1の食生活リズムとの調整を考える》という3つが捉えられた。

それに対して、家族という共同体としての時期区分は《1期：入籍前の生活との変化を感じる》、《2期：団らんできる時間を作るという同じ目標を叶えようとする》の2つが捉えられた。すなわち、1期では、当事者1と当事者2が共にこれまでの食習慣との違いを経験し、互いに語らずとも違いを自覚しながら「一緒に夕食を食べる」という径路に向かっていった時期であった。しかし、「当事者2の妊娠」が「夕食」という日常的な時間を「家族団らん」や「コミュニケーションがとれる時間」であるということ認識する当事者間共通の契機となり、互いに《2期：団らんできる時間を作るという同じ目標を叶えようとする》という時期に移行していった。

また、図3に示すように、《2期：団らんできる時間を作るという同じ目標を叶えようとする》に移行してからの当事者2の径路は比較的安定してEFPに向かっているのに対し、当事者1の径路が不安定に揺れ動いていることがわかる。このような揺れ動きについて当事者1は一緒に遅い夕食を食べることにに対して心配になることが多く、一緒に食べていいのかわかぬかを悩んでいたことを語っている。つまり、当事者1は「一緒に夕食を食べる」

(4) 当事者1のイメージーションループによる
分析と結果

当事者1が「一緒に夕食を食べる」に至ったイメージーションループは図4と図5のとおりである。ここでは、当事者1と当事者2の「家族という共同体」としての時期区分とした1期と2期に分けて図を示している。『食事を一緒に食べたいという気持ちが強くなる (BFP①)』は当事者1にとって「一緒に夕食を食べる」ことについて自覚的に考え始めるトリガーとなった出来事であるが、ここでは「一緒に夕食を食べる」というアウトカムに至るまでに「過去の団らんに関する良い思い出」という「リソース」が捉えられた。

図4のループaは『食事を一緒に食べたいという気持ちが強くな』って、その後「父親との会話も増える」ようになった時である。ここでは「過去の団らんに関する良い思い出」がリソースとなり、〈力士時代の夕食が

唯一の団らんだったことを思い出す〉という過去を振り返っていた。「家族っていっても、オヤジは親方だから先に食べる事が多くて、自分は他の力士たちと一緒に食べてたけど。その時は力士たちと色んな話をしたりしてたから、そういえばあの時は団らんっていう感じだったな。まあ、力士にとって食事はトレーニングみたいなものでもあるけど」と語り、当事者2と一緒に夕食を食べ始めて食事時の会話が増えたことで「団らんのひと時っていうのが『ご飯』っていうのはすごく感じる」と語った。

図5のループbとcは当事者2が妊娠し、一緒に食べていていかに悩んでいた時である。ここでは「当事者2の生活状況」がリソースとなり、〈食事時間を自分に合わせて当事者2に無理をさせているのではないかと〉いう現在の状況について想起しながら、「育児が始まった後の見通し」というリソースも重なって〈子どもが生まれたら一緒に食べられる時間が減るかもしれない〉という未来を想像していたことがわかった。つまり、TEM

図4. 1期における当事者1のイメージーションループ

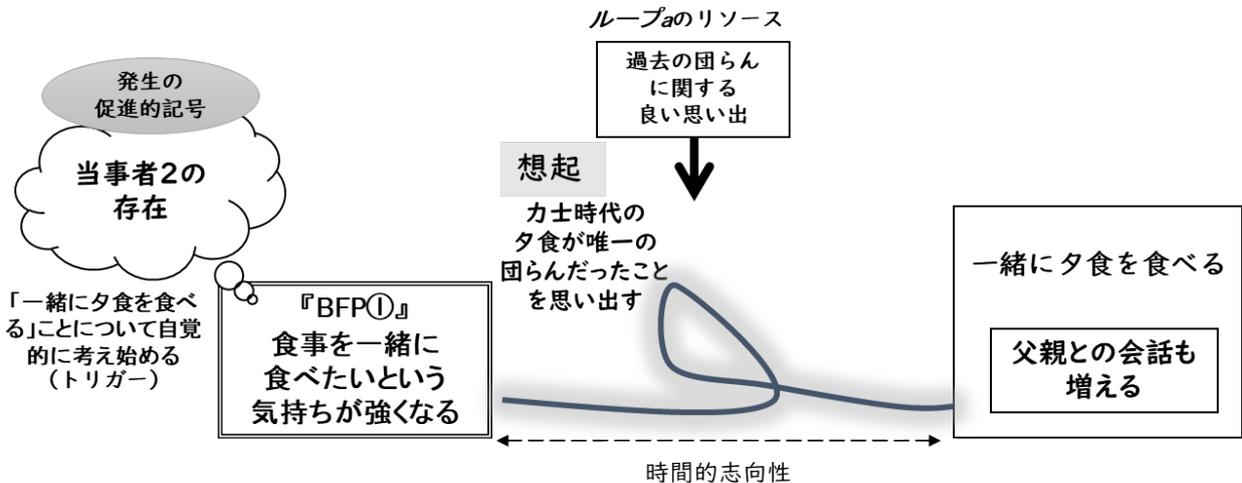
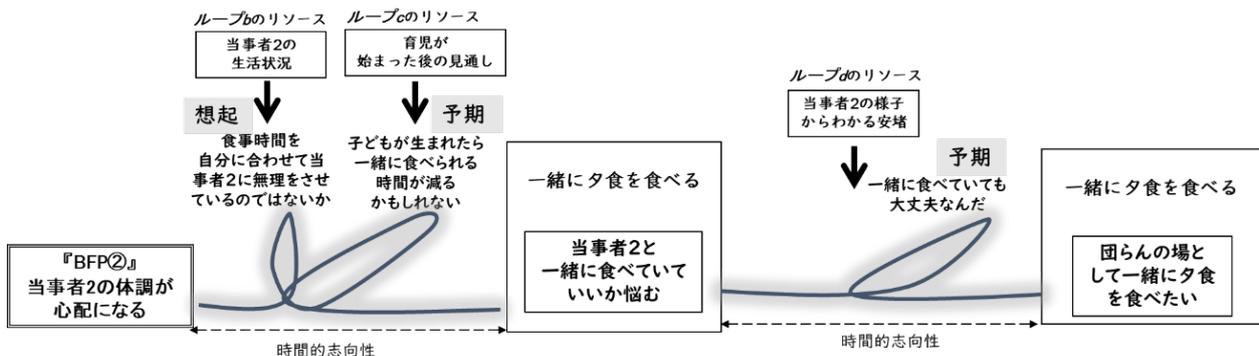


図5. 2期における当事者1のイメージーションループ



図では当事者1の「一緒に夕食を食べたい」という個人的な気持ちが強く影響していたようにも思われたが、その背景には当事者2の生活状況と育児が始まった後の見通しという“家族”を案じる予期をしていたことが明確になった。そして、ループdは「当事者2の様子からわかる安堵」がリソースとなり、当事者2と一緒に夕食を食べる時間を作ろうとしていることを感じられたことで「一緒に食べていても大丈夫なんだ」ということを予期していた。また、図4と図5では当事者1の「一緒に夕食を食べる」というアウトカムは同じであっても、その時々で「一緒に夕食を食べる」ことに対する意味づけが異なっている様相として捉えることができた。つまり、当事者1の中では一緒に夕食を食べるという行為自体に「父親との会話も増える」(ループaのアウトカム)、「当事者2と一緒に食べていていいか悩む」(ループbとループcのアウトカム)という意味づけを持っており、「団らんのもと一緒に夕食を食べたい」(ループdのアウトカム)という未来の姿を期待する意味づけを持っていたことがわかった。

(5) 当事者2のイメージネーションループによる分析と結果

当事者2が「一緒に夕食を食べる」に至ったイメージネーションループは図6と図7のとおりである。1期の『体重が増える (BFP①)』は、当事者2にとって「一緒に夕食を食べる」ことについて自覚的に考え始めるトリガーとなった出来事であるが、一緒に夕食を食べるということをやめるトリガーにもなり得た出来事であった。しかし、「実家の家族とのこれまでの食習慣」というリソースの影響を受けて、当事者1と「一緒に夕食を食べる」というアウトカムに至ったことがわかった。

ループaは『体重が増えた』ことによって当事者1と遅めの夕食を食べ続けるかどうか悩み始めた時であったが、当事者2は「実家の家族とのこれまでの食習慣」がリソースとなり、〈基本的に家族そろって食事をしてきた〉過去のことを思い出していた。そのため、当事者2にとっては家族と一緒に食事をするのは当然のことであり、違和感を持つものではなかった。

2期のループbは当事者2が妊娠した時期であり、「妊婦である自分と胎児への影響」と「当事者1への関心による食事調整」がリソースとなり、〈体調に異常がなければ当事者1と食事を通じて団らんができる〉という現状に対する予期をしていた。そのことによって、これまでにはすることがなかった間食を17時頃にするようになった。このころのことについて当事者2は「妊娠して太りすぎるのは良くないけれど、これまでの『太った』っていう感じとは全然気持ちが違って。妊婦検診で赤ちゃんが元気に育っていることが分かって自分の体調が悪くなければいいと思う気持ちの方が強くなったからかな」と語っている。また、「当事者1と一緒に夕食を食べるとしても、だんだん『食べる』よりは『話す』『聞く』のほうがメインになってきたように思う」というように、当事者1自身に対する関心が深まり、当事者2にとっての共食の役割が食事の場を通じて会話をするのが中心になっていったことがわかった。ループcは「当事者1とのコミュニケーションに都合がよいタイミング」がリソースとなり、〈夕食時間が一番ゆっくりできて話しやすい〉という当事者1とのこれまでの食生活と仕事事情を考慮して今後の夫婦の食事時間について想起し、遅めの夕食という現状を受け入れるようになっていた。また、図6と図7では当事者2の「一緒に夕食を食べる」というアウトカムは同じであっても、当事者1

図6. 1期における当事者2のイメージネーションループ

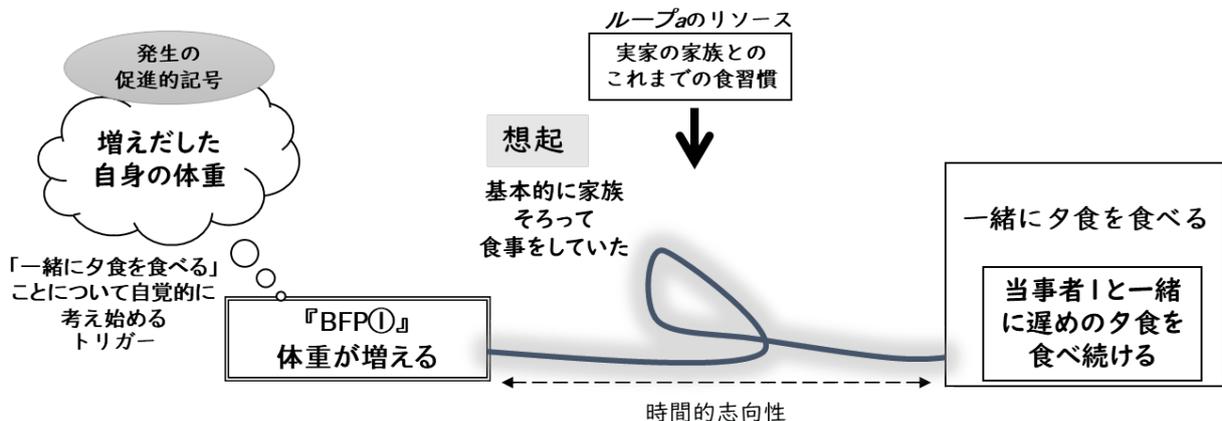
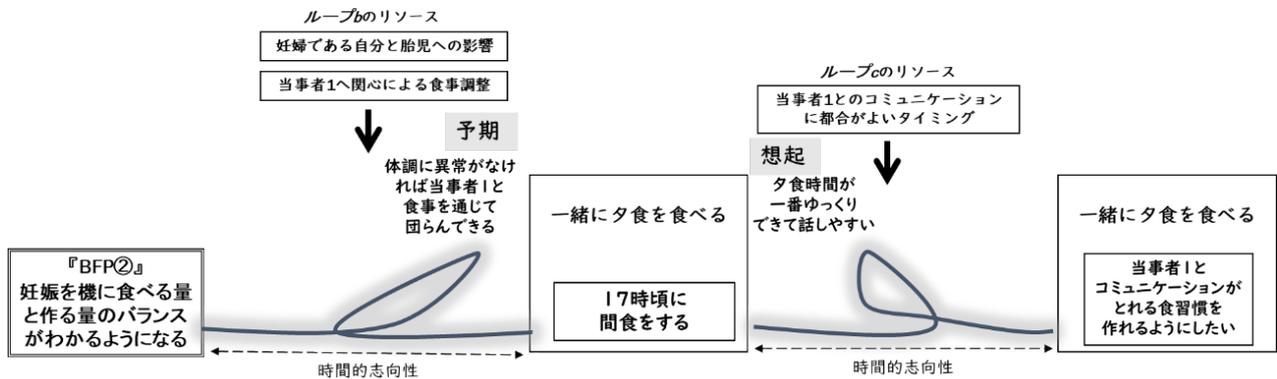


図7. 2期における当事者2のイメージーションループ



と同様にその時々時点での「一緒に夕食を食べる」ことに対する意味づけが異なっている様相を捉えることができた。つまり、当事者2の中では一緒に夕食を食べるという行為自体に「当事者1と遅めの夕食を食べ続ける」（ループaのアウトカム）、「17時頃に間食をする」（ループbのアウトカム）という意味づけを持っており、「当事者1とコミュニケーションがとれる食習慣を作れるようにしたい」（ループdのアウトカム）という今後の計画を考える意味づけを持っていたことがわかった。

総合考察

——本事例研究から得られた示唆と今後の課題

本論文は結婚を機に日常的に行われるようになった「一緒に夕食を食べる」という共食を通じて、異なる環境で育った個人が家族としての共食の場をどのように創り上げていくのかという径路を「双方向TEM」と「TEMのイメージーションモデル（宮下ら, 2022b）」を活用して分析した。ここでは、本事例研究から得られた示唆について論じ、最後に今後の課題を述べる。

(1) 夫婦関係の構築と家族の共食に関する示唆

本事例研究の研究協力者である当事者1と当事者2は結婚初期において当事者2が妊娠するという経験をした。当事者2が妊娠したことは一緒に夕食を食べることに対する当事者間共通の影響を持つ出来事となっていたが、当事者1にとっては、「一緒に夕食を食べる」ことに対して迷いや葛藤が多くなった継起であり、当事者2にとっては迷いを受け入れる継起となった。しかし、互いの思いに異なるところはあっても、「一緒に夕食を食

べる」という行為が実現されている。また、その時々での「一緒に夕食を食べる」という行為が実現されていた中には「父親との会話も増える」という行為や「17時頃に間食をする」という行為など当事者たちの異なる意味づけを持った行為として実現されていた。そして、入籍し同居してから妊娠がわかるまでの1期は各人が入籍前の生活との変化を感じる時期であり、妊娠が分かってからの2期では団らんでくる時間を作るという同じ目標を叶えようとする時期へと変化していた。

「団らん」という言葉には、家庭での共食の場を一家のシンボルであるかのように思わせる面があり、共食は必ずしも家族の連帯にとって大きな意味を持っているわけではない（坂田, 1996）という指摘もあるが、本事例研究における当事者たちにとっての一緒に過ごす時間は「夕食の場」であり、「夕食の場」が「団らん」としての意味を持つようになっていた。当事者1は「団らんは、癒しを求めることができたり、自分の悩みや日々の出来事、これからの夢や願望が話せるような時間」であり、そのようなことが話せることによって「モチベーションが上がったり、仕事を頑張れるようになったりするというイメージがある」と語っている。日本においては「家庭の役割」を「家族の団らん（64.2%）」、「休息・やすらぎの場（63.8%）」、「家族の絆を強める場（55.3%）」としている夫婦が多いことから、家庭がケアされる場として意味づけられている傾向がある（永井, 2020）とされており、当事者1が考える家庭の役割は永井（2020）が指摘する家庭の役割とも似通っていた可能性もある。

また、当事者2にとっては子どもの頃からの食習慣の影響もあって家族が揃って食事することに違和感を持っていなかったが、それは言い換えれば家庭での共食はしななければならないものという社会通念にも似ていたのではないかと考えられる。しかし、自身のこれまでと

は異なる食習慣を持つ当事者1と生活を共にすることで、「一緒に夕食を食べる」という行為の主な目的が「食べる」ことを通じて「会話をする」ことへと明確化していき、当事者1と胎児を意識した家族としての共食を考えるようになっていった。

記号論的文化心理学者である Valsiner (2014) は「食べる」ということについて、「食べることは日常的な行為であり、生存や社交性には欠かせない。(中略)人と人との間に親密さを確立する根拠として、摂食はセクシュアリティを凌駕している(著者訳, p. 33)」と指摘している。本論文で共食の定義を「食事をコミュニケーションの手段であるとし、心的負担が軽減される他者との関係維持を可能にする行為」ならびに「食事を共にする他者の心を想像したり喜ばせたりするイメージ力が必要とされる行為である」としたが、本事例では当事者1も当事者2も「食事を共にしたい」という気持ちとともに夫婦としての親密さを育てており、互いの健康状態や現状を気かけながら心的負担が軽減できる夕食の場を創り上げようと考えていたことが捉えられた。

このように、互いのライフスタイルが異なっていたとしても、各人が自身の現状と他者の現状とに折り合いをつけながら、互いが望む最善策を見出せるように努力している。本事例では「一緒に夕食を食べる」という日常生活の中のささやかな時間を対象としたが、それぞれのその時間の中で育まれる関係性や親密性への理解を深めることは、家族の個人化が進む時代において「家族のつながり」とは何かを考えることの重要な示唆を与えてくれるのではないだろうか。

(2) 今後の課題

本論文は、異なる環境で育った個々人が夫婦となり、どのようにして「一緒に夕食を食べる」という共食の場を創り上げていったのかということについて考えてきた。しかし、家族は普遍性を備えながらも多様性と個性をもっているため、家族や夫婦の食生活やその実態を理解することは決して容易なことではない。家族の共食が、家庭の役割や家族のつながりを考えることと関連があるならば、共食を通じたどのような夫婦や家族の関係構築過程が見られるのかに目を向ける必要があるだろう。また、家族を単なる一括りの家族として扱うのではなく、個人が集うことで家族になるのだということから家族のつながりや個人化の在り方を考える必要があるのではないかと考える。

家族や夫婦という分野は閉ざされた他者の入りにくい

領域である(吉田・津田, 2007)とも指摘されているとおり、本論文の限界として第一著者の家庭を対象とすることにとどまった。また、本事例では「当事者2の妊娠」が当事者1と当事者2の「一緒に夕食を食べる」ということに対する思いを巡らす大きな継起の一つとなったと分析したが、それ以外の微細な径路を捉えることには限界があったように思われる。しかし、夫婦間の対話を通じて相互行為的オートエスノグラフィーを行ったことで普段は気づきにくい自他共の異なる食習慣や共食に関する考え方が日常的な共食にどのような影響を与えていたのかを捉えることができたことは、共食を通じた夫婦や家族の関係構築のあり様を質的に研究するための示唆を与えてくれたのではないだろうか。

上述したように、家族や夫婦という分野は他者の入りにくい閉ざされた領域であり、TEMによる可視化が必要な領域でもある。今後は、「双方向 TEM」ならびに「TEM のイメージーションモデル」をさらに発展させ、共食を通じた夫婦や家族の関係構築のあり様をより深く捉えることを目指すとともに、研究方法の精緻化と研究範囲の拡大を図りたい。

おわりに

文化心理学とは「人間が生まれてからその環境と関わりながら、また、文化を移動したときに新しい文化に適應しながら、それぞれが人間らしくなっていくその普遍的なメカニズムを知ろうとする心理学(p. 15)」である(サトウ, 2019)。そして、イメージーションとは、現実の「今、ここ」から離れて、過去・現在・未来の関係性の中で可能なことや不可能なことについて探索したり、新たな経験をつくり出したりすること(Zittoun, 2020; 木戸, 2023)である。

本論文では相互行為的オートエスノグラフィーの観点をういながら当事者1と当事者2の双方向 TEM 図を描いて分析し、イメージーションループを用いてどのような過去や未来を想像しながら一緒に夕食を食べることを実現していたのかを考察した。現代社会は、社会や環境の変化によって家族がそろって食事をすることは困難な状況だとされているが、個々人が現状との折り合いをつけながら食事を共にして(いなかったりして)いるという事実がある。また、吉田・津田(2007)が結婚初期では相似性や愛情が重視されるが、それはしだいに相補関係に中心が移るとも指摘しているように、時間が流れ状況が変われば、新たな家族の共食に対する考え方が生ま

れていく可能性もある。ライフスタイルやライフステージに伴う家族の共食に対する意味づけの変容を継続的縦断的に研究するという展開を通して、共食と夫婦や家族のつながりに関わる知見を深めることができるのではないかと考える。

引用文献

- ベルタランフィ, L. F. (1973) 一般システム理論——その基礎・発展・応用 (長野敬・太田邦昌, 共訳). みすず書房. (Bertalanffy, L. von (1968) *General system theory: Foundations, development, applications*. New York: George Braziller.)
- 衛藤久美・會退友美 (2015) 家族との共食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連——海外文献データベースを用いた文献レビュー. 日本健康教育学会誌, 23, 71–86.
- 福田育弘 (2021) 第一章 共食と団欒——共食を楽しむ感性の誕生. とともに食べるということ——共食にみる日本人の感性 (pp. 10–72). 教育評論社.
- 福田茉莉 (2022) 1 章 TEA (複線径路等至性アプローチ) の基本的概念. 安田裕子・サトウタツヤ (編著), TEA による対人援助プロセスと分岐の記述——保育, 看護, 臨床・障害分野の実践的研究 (pp. 2–12). 誠信書房.
- 原田信夫 (2013) 料理・共食の意義と日本食文化の歴史. 資料 1 日本人の長寿を支える「健康な食事」のあり方に関する検討会 (2013/10/21). <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000026845.pdf> (情報取得 2021/03/02)
- 石川伸一 (2019) 「食べること」の進化史——培養肉・昆虫食・3Dフードプリンタ. 光文社.
- 伊藤裕子 (2015) 夫婦関係における親密性の様相. 発達心理学研究, 26, 279–287.
- 井本由紀 (2013) オートエスノグラフィー——調査者が自己を調査する. 藤田結子・北村文 (編), ワードマップ 現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践 (pp. 104–111). 新曜社.
- 上川多恵子 (2023) 第 2 章 TEA の基本概念一覧. 上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美 (編), カタログ TEA —— 図で響きあう (pp. 5–10). 新曜社.
- 河上睦子 (2016) 共食と共生——食・ジェンダー・ケア. 唯物論研究協会第 39 回大会個人研究発表 立教大学, 1–6.
- 河村美穂 (2018) 人とヒトが食でつながるといふことの意味. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 31, 78–89.
- 木戸彩恵 (2023) 第 6 章 イマジネーション. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編), [改訂版] 文化心理学——理論・各論・方法論 (pp. 63–75). ちとせプレス.
- 木村駿介・嘉瀬貴祥・大石和男 (2018) 共食の質尺度の作成および精神的健康との関連. 日本家政学会誌, 69, 439–447.
- 小松孝至 (2018) 意味 (meaning). 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 (編), 質的心理学辞典 (p. 15). 新曜社.
- 熊倉功夫 (1993) 近代の食卓をめぐる文化. 調理科学, 26, 149–154.
- 熊倉功夫 (2014) 三 食事作法の変化. 文化としてのマナー (pp. 29–62). 岩波書店.
- 松嶋秀明 (2004) 当事者の視点を理解する——現場で交渉される意味をみる方法. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編), ワードマップ 質的心理学——創造的に活用するコツ (pp. 92–98). 新曜社.
- 宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ (2022a) TEA (複線径路等至性アプローチ) における記号概念の考察——パス, ヴィゴーツキー, ヴァルシナーを手がかりに. 立命館人間科学研究, 44, 15–31.
- 宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ (2022b) TEM (複線径路等至性モデリング) のイマジネーションモデルに関する考察——記号圏とイマジネーション理論を踏まえて. 立命館人間科学研究, 44, 49–63.
- 村田ひろ子・政木みき (2016) 家族と食の関係は変わるのか——『食生活に関する世論調査』から (2). 放送研究と調査, 66 (11), 2–21.
- 無藤隆 (2018) システム (system). 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 (編), 質的心理学辞典 (p. 130). 新曜社.
- 永井暁子 (2020) 家事と仕事をめぐる夫婦の関係. 日本労働研究雑誌, 719, 38–45.
- 中川李子・長塚未来・西山未真・吉田義明 (2010) 共食の機能と可能性——食育をより有効なものとするための一考察. 食と緑の科学, 64, 55–65.
- 西野理子 (2001) 家族認知の条件——最年長のきょうだいへの認知の分析. 家族社会学研究, 13, 61–71.
- 農林水産省 (2018) 3. 共食や孤食の状況. 食育に関する意識調査報告書 (2018/3).

- <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/h30/3-3.html/> (情報取得 2021/03/02)
- 表真美 (2010) 食卓と家族——家族団らんの歴史の変遷. 世界思想社.
- 表真美 (2012) 食と団らん——歴史をふりかえり, 今後を考える. 生活環境学研究所研究報告, 44, 37-41.
- 坂田博美 (1996) 家庭での日常生活における共食の文脈——石毛氏の「家庭における共食」命題再検討. 消費者行動研究, 4, 77-89.
- サトウタツヤ (2006) 発達の高多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線径路等至性モデル. 立命館人間科学研究, 12, 65-75.
- サトウタツヤ (2015) 文化心理学から見た食の表現の視点から食文化とその研究について考える. 社会システム研究 (特集号), 197-209.
- サトウタツヤ (2019) 第3章 記号という考え方——記号と文化心理学 その1. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編), 文化心理学——理論・各論・方法論 (pp. 27-39). ちとせプレス.
- 品田知美 (2019) 家族との食事時間——子どものいる夫婦の生活時間調査から. 駒澤社会学研究, 53, 17-41.
- 徳永弘子・武川直樹・木村敦 (2016) 孤食と共食における食事動作のメカニズム. 日本食生活学会誌, 27, 167-174.
- 十島雍蔵 (1998) 家族システム援助論 (9) ——オートポイエシス理論からみた家族システムの諸相. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 50, 155-166.
- 豊田香・卒田卓也 (2023) 「単方向 TEA」から「双方向 TEA」を開発する試み——不登校経験家族を事例として. TEA と質的探究, 1 (1), 1-19.
- 土元哲平 (2022) 転職におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. ナカニシヤ出版.
- 土元哲平・サトウタツヤ (2022) オートエスノグラフィーの方法論とその類型化. 対人援助学研究, 12, 72-89.
- ヴァルシナー, J. (2013) 新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化 (サトウタツヤ, 監訳). 新曜社. (Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.)
- Valsiner, J. (2014) *An invitation to cultural psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- 謝春游 (2020) 日本における中国人女性移民の食実践に関する人類学的研究——広島県在住の日本人の夫と中国人の妻の家庭における食生活を事例として. 綜研大文化科学研究, 16, 33-54.
- 山田昌弘 (2004) 家族の個人化. 社会学評論, 54, 341-354.
- 安田裕子 (2015) 1-9 緊張状態のあぶりだし——TEA による分析の流れ (その3). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編), ワードマップ TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する (pp. 52-59). 新曜社.
- 安田裕子 (2019) 1-2 TEA (複線径路等至性アプローチ). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編), ワードマップ 質的研究法マッピング——特徴をつかみ, 活用するために (pp. 16-22). 新曜社.
- 安井大輔 (2018) 第4章 食と社会学 食べるモノ・コトからみる社会. 朝敏夫・井澤裕司・新村猛・和田有史 (編), シリーズ食を学ぶ 食科学入門——食の総合的理解のために (pp. 59-74). 昭和堂.
- 吉田直樹・津田彰 (2007) 夫婦の心理的満足度と相互のコミュニケーションスタイル, 情報量, 役割一致度. 久留米大学心理学研究, 6, 21-26.
- Zittoun, T. (2020) 2019 年度 日本発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会 講演記録 ライフコースにおけるイマジネーション: 社会文化的心理学の視点から (Imagination in the lifecourse: A sociocultural psychology perspective). 発達研究, 34, 204-228.
- Zittoun, T., & Gillespie, A. (2015) Chapter 3 The loop of imagination. In T. Zittoun & A. Gillespie (Eds.) *Imagination in human and cultural development* (pp. 38-55). London: Routledge.
- Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016) Imagination: Creating alternatives in everyday life. In V. P. Glăveanu (Ed.), *The Palgrave handbook of creativity and culture research* (pp. 225-242). London: Palgrave Macmillan.

付記

本論文は, 2023 年に立命館大学に提出された第一著者の博士論文の一部を加筆・修正したものである。

謝辞

本研究の協力者として日々の生活や思いを第一著者と共有し, 貴重な洞察を提供してくれた第一著者のパート

ナーに深く感謝致します。パートナーの理解と協力なしには、この研究は実現しませんでした。また、本論文の査読者の先生方に心から御礼申し上げます。先生方から頂いた有益なご指摘により、本研究の質が大きく向上致しました。本研究で得られた知見が、夫婦や家族の共食に関する理解を深め、家族や夫婦関係構築過程の質的研究に寄与することができれば幸いです。

発行：TEA と質的探究学会
Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry
<https://jatq.jp/index.html>



編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik
<https://ratik.org>

